

田中逸平遺芳三録

解題

坪内隆彦

本稿は、本誌掲載の論稿「イスラーム先駆者 田中逸平・試論」で紹介した(三頁) 田中逸平の伝記のうち、比較的入手しにくいもの三点を収録したものである。田中逸平の伝記を含む著作としては、前嶋信次「日本人のメッカ巡礼」前嶋信次編『メッカ』芙蓉書房、一九七五年、土生良樹『神本利男とマレーのハリマオ／マレーシアに独立の種をまいた日本人』展転社、一九九六年、などがある。

「1 田中逸平」は黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下(一九三六年刊)の復刻版から再録したものである。同書は、「イスラーム先駆者 田中逸平・試論」(三三三頁)でも紹介した黒龍会が編纂したもので、一九三〇年に編纂作業に入り、一九三六年に下巻刊行をもって完成した。上、中巻と下巻の一部は東亜先覚運動史の本記からなり、下巻の大部分は先覚志士の列伝から構成されている。興亜運動における功績を称揚するという視点で編集されていることから、田中逸平の思想の

本質について十分言及されている。田中逸平伝は同書の二頁以上に及ぶ。一頁以下の分量の人物伝が大部分を占める中で、相当詳しい紹介となっている。なお、タイトル「田中逸平」下の括弧内は、経歴中の主要事項を示しており、「支」は「支那」を指す。

「2 国士、田中逸平伝」は、当時拓殖大学学友会副会長を務めていた小川忠貞氏が執筆した田中逸平伝である。小川氏は、昭和四一年一月から昭和四五年一月まで、日野月孝治会長の下で副会長を務めた。ここで紹介された学部三期の荒井金造氏の書簡には、田中逸平が漢学の知識を深める過程についてやや詳しく述べられているほか、「学者と云うよりも清貧に甘んじて狷介で国士を以て自任し、談論風発の快男児で拓大出身者中異色の人物であると思う」との田中評が示されている。さらに、若林半『回教世界と日本』などに拠りながら、田中の行動を紹介した上で、小川氏は「田中逸平氏の名は、単に拓殖大学先輩としてでなく、日本の回教史の蔭の人として、永久に記憶されるべきであろう」と書いている。

「3 天鐘・田中逸平伝」は、自身もムスリムとして活躍した小村不二男氏の田中逸平伝である。イスラミックセンター・ジャパンが発

行する雑誌『アッサラーム』に掲載された。小村氏は、田中について「享年五三歳、アジア大陸数億の回教民族（ムスリム）を警策し覚醒を促し、延いては日本イスラーム史上に輝かしき一歩ページを印された」と、極めて高い評価を下している。小村氏は、戦争中には蒙古の厚和（現在の内蒙古自治区呼和浩特市）に在って、イスラーム関係の仕事に携さわっており、自身の体験に根ざした田中伝は、豊富なエピソードを含む極めて詳細なものである。ちなみに、小村氏は一九八八年に、

『日本イスラーム史・戦前、戦中歴史の流れの中に活躍した日本人ムスリム達の群像』を刊行、田中逸平を含めたイスラーム先覚者についてまとめている。自らが当事者だっただけに、客観性に欠けるとの評価もあるが、他の文献資料と照らし合わせることによって、その資料的価値はいまなお高いのではなからうか。

なお、本稿への再録を快く承諾していただいたイスラミックセンター・ジャパン編集担当者に、記して感謝したい。

1 田中逸平（日露役特別任務、メツカ巡禮、支）

黒龍会 東亞先覚志士記伝

（原書房 一九六六年）

天鐘道人と號す。明治十五年二月二日東京府下小金井村に生れ、郁文館中學校を卒へて拓殖大學の前身臺灣協會學校に入り、明治三十五年之を卒へた。同校は臺灣協會の事業として三十三年創立せられたもので、主として臺灣及び南支那地方で活動すべき人材を養成することを目的とし、支那語教育に重きを置いたが、彼はこゝで支那語を専攻し、第一回の卒業生として送り出されたのであつた。在學中鹽谷時敏（號青山）の門に通ふて儒學を修め、その學亦大に進む所あつた。卒

業の年服部宇之吉に隨つて北京に遊び、爾來北支滿洲の各地を巡歴し、日露の役に際し陸軍通譯となつて特別任務に従ひ、諜報上貢献する所多く、戦後勳六等單光旭日章を授けられた。青島攻圍戦の後ち本郷房太郎大將が駐屯軍司令官となつて赴任するに方り、その麾下に屬し山東に渡り軍政を輔けて貢献する所尠ならず、功に依つて勳五等瑞寶章を賜はつた。この山東に於ける活動が機縁となつて陸軍との關係を離れた後も依然基地に留り、居を濟南に卜して歷下書院なる學舎を起

し、支那人の子弟を集めて教授した。蓋し學生時代に鹽谷青山の門に學んで儒學に造詣する所深かつた彼は、近代支那の風潮に對して頗る慊らざるものがあつたので、孔子の廟の所在地たる山東に於て支那人の間に儒學思想を復興せしめ、以て混亂せる隣邦の思想界を救ひ、進んで大支那を救はんとする遠大なる念願を起したのであつた。斯くして歴下書院に於て隣邦の子弟を薰陶すること約十年、其間また自ら研鑽する所を發表して『復興管仲論』を著した。その精神は管仲の所謂『四維張らざれば國乃ち滅亡する』の意を明かにして時人を警醒せんとするにあつたが、彼が管仲の人となりを景慕し、その業績を闡明し、その精神を高調するところ、筆端に熱情溢れて論旨頗る剴切を極めた。彼の山東に在るや屢々曲阜の孔子廟に詣で、また泰山に登ること十數回、古來『山は泰山より大なるはなく、史は泰山より古きは無し』と稱せらるゝこの名山に登つて鬱勃の氣を吐くを例とした。

大正六年頃からは心境に一轉機を來し、彼が亞細亞の復興を期せんとする念願はやがて回教に向つて動き始めた。これがために大正十二年濟南の回教寺院清真南大寺に入り、翌年回教の導師曹鳳麟によつて受戒修禮し、爾來北京、天津、張家口等の回教寺院を歴訪して回教徒と深く結び、同年五月支那の回教徒千餘名が聖地メツカを參拜するに當り、濟南を中心とした百六十名の支那の巡禮客の一團に伍して亞刺比亞に向ひ、日本人として第二人目（第一人目は山岡光太郎）の回教歸依者としての參拜を終えた。何が故に彼が回教に歸依するに至つたか、それは彼が歸朝の後自己の所信を披瀝したる『回教及び大亞細亞主義』の一書に依つて明かなことであり、又た本書中卷に紹介した

所であるから茲には省略するが（中卷八四九頁以下參照）要するに右に述べた如く亞細亞の復興を期せんとする遠大なる念願に基くものであつた。大正十四年滿洲に赴いて同地に於ける回教徒の状態を視察し、更に濟南に赴いて歴下書院を再開し、月刊雜誌『山東』を發刊して自家の學問と信條とを發表し、同年末歸朝して大東文化學院の教授となり、平生の蘊蓄を傾けて學徒に教授した。爾後『白雲遊記』『高天原雜記』の二著を公にし、前者に於ては回教に關する見聞と信念を明かにし、後者に於ては回教徒たる立場から我が肇國の歴史に溯つて國體に關する彼の信念と解釋とを表白した。昭和八年十二月胃癌に罹り、豫ねての念願を果たす爲め、病を力めて第二回の聖地巡禮の途に上つた。この行は若林半に負ふ所多かつたが、山本太郎、山内秀雄を引卒して行く／＼産業貿易等の調査に任じ、印度、阿富汗斯坦、波斯、イラク、埃及等を遍歴し、途中山本をアフガニスタンに留め、山内をシリヤのベイルートから歸國せしめ、同地に於て土耳其通歴中の中尾秀男と落ち合ひ、九年三月メツカの大祭に參じメツカの近郊ミナの宮殿でネジト國王イブン・サウドに謁見したのを首めとし、到る處に於て回教の重要人物と會見して意見を交換する等仔細に西南亞細亞の形勢を視察する所あつた。然るに旅中病の愈々重れるにより豫定を變更し、九年五月東京に歸り淺草病院に入院して療養を加へ、後ち川崎大師河原の居に於て靜養したが、同年九月十五日遂に長逝した。年五十三。越えて十月二十日青山葬場に於て折柄來朝中の回教大長老イブラヒムの主宰で回教の儀式に依り葬儀を営まれた。彼が巡禮より歸朝するや病頗る加はり、憔悴骨立、全く別人かと思はるゝ程衰弱してゐたが、

神戸上陸後その病軀を押し直に伊勢大神宮に参拜し、所謂お禮参りを果して後ち始めて東京に向つたのであつて、回教に歸依するとはいへ、祖國の傳統を忘るゝ如き異教徒と其の選を異にしたことは、此一事によつても知られる。遠大なる事業は生前に於て僅にその一端を實現したに過ぎないが、その精神を繼いで起つ者乏しからず、この意味に於て彼のその精神やまた不滅といふべきである。

彼が第二回のメツカ巡禮に際し、日誌『天鐘日録抄』（自昭和八年十二月十五日、至同九年五月十九日）を遺されたが、左は其の中より抜いたものである。

吳淞角を過ぐる時（十一月十九日）

大君のみうたかしこみ朝な〜よみつゝ幾日わたつみを航く

海上有喜報（同廿一日香港を出て）

海原の中にも天津御聲あり日嗣の御子よけふしあれます

國中の喜如何

うれしさに熱き涙の湧き出でぬ日嗣の御子のあれますと聞き

カムラン灣外にて（同二十五日）

古來賢達士。不_レ得_レ止而動。

物我都一擲。萬里一孤舟。

十二月三十一日。天晴氣涼月明（日）

昭和八年も印度洋上に暮れぬ。洋上之明月孤客を照らす。家郷今夕情如何。妻や携兒寒月に對して感慨深からん。不日上陸遠征第一歩の淨業に従ふ。一片氷心熱沙行、化得化不_レ得多少人。此朝浴汐。此夕吃そば、大祓之儀も印度洋中に自戒自祓。夜更月益冴、大晦日

に望み、仰_二冲天之月輪、伏而觀_二萬波漾々。……嗚呼此歲全完。

除夜の鐘天で撞いたか印度洋

昭和九年正月元旦。早起向_二東天、念_二普門品、望_二月沒_二西天、旭光出_中海上_上。

放浪一孤舟。行到印度洋。

南無天照皇。元旦拜_二日出_一。

八時祝_二屠蘇、吃_二雜煮、盛宴也。十時集_二合甲板_上、唱_二國歌、遙拜_二皇居、奏_二萬歲。外人觀_二此壯嚴、感如何。終日靜居、迎_レ年暢然矣。不_レ知家郷之情如何。

孟買旅懷（同八日）

旅の夢結びかねたりまどらかに何とはなしに物思ひつゝ、

カプール出發（二月一日）

阿富汗の野山を籠めて春かすみ鈴の音靜かカラバン行くかも

宿_二沒古小城_一（同日）

行到平沙幾百里。客舍擁_レ爐夢不_レ圓。

堪_レ聞番歌聲最悲。沒古城外寒月高。

テヘラン郊外弔_二益子勇中尉

墓_二（同念三日）

遠來弔_二其魂。原頭不_レ得_レ塚。

端是第一義。仰看雲間峯。

三月二十七日（火）午前案内者あり行宮に到りイブンサイドに謁す。大官列坐、ハチ代表、全アラブ會長等百餘名環坐、壯嚴裡、予、王の右側に接して坐し、後相對して辭を交ゆ。正に劇的光景なり。

了て大藏大臣の帳に到り、侍従長通譯として交辭。實に日本史上の一頁也。此日イギリス打三處二十一、第一イギリス石畔賊手を搦ぐ。アラフアテにてヴルドウイン人盜を爲す。コーランの律に因て斷ず

——先人をさぐる——

2 国士、田中逸平伝

小川 忠 惠

〔老荷谷たより〕昭和四十四年四月

○

たまたま回教に知識を持つ学友からその名を聞いて興味を抱いた。

第一期生と云う。第一期生と申せば明治三十六年卒業の筈で正に先輩で、奇しくも脇光三氏と同期である。

当時、校名は台湾協會学校（台湾協會専門学校となつたのは三十七年四月）である。

「拓殖大学六十年史」によると、

明治三十七年本年卒業者（注、三十六年卒も含まれていると思う）

および在學生九十六名は、陸海軍通訳として日露戦争に従軍した。こ

と。

（遺族、川崎市大師河原遠藤野、田中柏）

の事情を後に大学幹事長門田正経氏は次のように説明している。

「急に開戦せられたことであつて、この戦争の土俵場である所の支那語の通訳に当る所の人が極めて乏しかった。陸軍省は之を外国語学校に求め、その他かねて清語に通ずる者の間に求めたけれど、尚ほ其数は足らなかつたのみならず、本校に於ても時こそ来たれ、直接に国家事業に貢献するのはこの時であろうと思つたのであります。それ故にこの日露戦争には卒業生並びに在校生を合せて、前後延人員では九十余名の人を通訳として従軍させました」

これら従軍者の行費は三十九年四月発表されている。

この中に、齊藤甲一、星野桂吾、伊藤周松、保田宗治郎、宮原民平諸氏の名もあり、「従軍死亡者行費」の中に「勲等旭六、金一〇〇〇。三十七年中敵中にて捕われ銃殺せらる、脇光三」の名がある。

田中逸平氏の場合は、

本校在学中従軍して遂に帰校卒業しなかったもの、とあるから脇光三氏と同じく学友として推薦されたものであろう。旭六の勲等で四〇〇円の賜金である。

田中逸平氏、東京小金井の人、在校中三十五年服部宇之吉氏に従い北京に入り、三十七年通訳として出征、また大正三年には日独戦争にも従軍した、同氏はその後山東に居を定め、しばしば孔子廟に詣で、泰山に登ること十三回に及んだという。大正十一年一旦帰国したが十三年済南に行き南大寺に寓し、回教徒となり各地の回教寺院を歴訪した、日本人で回教徒となったのは田中氏が先達である。

同年アラビヤに入りメッカ（アラビヤの首都、マホメットの出生地）に詣でた。その後も「回教及び大亜細亜主義」を著わし、大東文化学院教授になるなど、東亜の各地で活発な活躍をしたが、昭和八年東京で死去した。

以上が田中逸平氏の略歴である。そこで私は全氏に就てもっとくわしく知ってる人が居ないかと方々に問い合せた。名前は聞いた覚えがあるがそれだけしか知らないかと云う人が多かった。もっとも生存されて居れば九十才に近い頃と思うので、ハッキリした記憶はむづかしかった。その中で得た御返信二通を次に掲げます。

○ 齊藤甲一氏（学第二期。元本学教授）

冠省、お尋ねの件昔の事でしたっきりした記憶もなく御期待に副うことも出来ませんが、小生の記憶を辿って知っている事だけ申し上げます。聊か御参考になれば望外の幸せです。中国は昔、官吏登用試験の方法として漢文字を主となし、秀才、挙人、進士の順序で官吏を登用しておりました。然しながらこの方法では中国の政治経済の進歩発達を期することが出来ません。

そこでこれが改革に目覚め、新制度に依る方法を採用することになりました。そこで日本から故服部文学博士を招聘し、大いに学制を改革することになりました。当時何かの縁故で故田中逸平君がその配下になり、その事業を助け、かたがた回教を研究することになりました。中国にも回教信者はその数こそ少ないのでありましたが、その生活は全く一般中国人と異り、豚肉を食せず、鶏肉を食し、生活様式が異っておりまして。

以上

○ 荒井金造氏（学第三期 元領事 元山梨学院大学教授）

拜復、田中逸平氏は一期卒業生中で漢学と中国語は最も秀でた第一人者で、その基礎知識は従兄に当る塩谷温博士の家柄が代々漢学者で、所蔵の漢書が豊富で研究するのに便利であったのと、母校講師馬紹蘭副貢士につき指導を受けたのにも依るかと思われる。尤も塩谷博士は官学肌のためかソリが合わないようでも親しみは薄かったようであった。日露戦争後、中国浪人の先輩中西正樹翁が済南で日刊漢字新聞の済

南新報を経営中その主筆となり、殆んど毎日掲載された論説は中国人読者の注意を惹いたが後に中西翁と意見が合わず辞去した。その後「日本及び日本人」に投稿し中でも管仲の霸道に関する論説（日本語）は数回にわたり連載されたが堂々なるものであった。

大正の末期私が張家口に駐在仲来遊し、三日ばかり滞在し互いに語り合ったがその頃は無職で専ら回教を研究して居り、後に大東文化学院に講師として教鞭を執って居た。

私が外務省を辞して郷里に在り、昭和の初期に上京し宮原民平氏とともに一期卒業保田宗次郎氏よりの連絡に因り同氏を日産重役室に訪問したるに田中氏が来合わせ、それに又タイ国に数年間居たという若い母校出の清野氏とも落ち合い、田中氏が単独にてメッカ地方遊歴の壮挙門出を祝すべく、主人役の保田氏の案内で赤坂の料亭に五人が赴いて会飲したのが田中氏と最後の会見となったのである。

その直後田中氏は飛行機の便利もないその頃単独で回教の聖地メッカその他の各地を巡歴して無事帰国し、その紀行記を出版し売本行脚と題する稿を「日本及日本人」に連載したが間もなくして五十余才で早歿したが、この大旅行で幾分か健康を害したのに原因したかと思われる。同氏は漢文も日本文も達者で名文と云うよりも新聞向きの早い方であった。

学者と云うよりも清貧に甘んじて狷介で国士を以て自任し、談論風発の快男児で拓大出身者中異色の人物であると思う。

○
以上二先輩の御返信を見ても容易ならざる人物のように思われる。

更にこれを回教政策の研究と、実践に生涯を捧げたと云われる若林半氏の「回教世界と日本」（昭和十二年版）によるとその足跡の大きさが具体的に認識されて来る。それにはこう書いてある。

自分（若林氏）は大先輩頭山満翁と内田良平先生と謀り畏反田中逸平君を青島に訪い東亜経論に於ける回教政策の重要性を説いた所同君大いに共鳴し、爾後同君は専ら回教及び回教民族の研究に熱中して大正六年回教の持戒を受けるに至った。自分は東都にあって政府の要路や識名に回教問題の重要を説いたが多くは耳を傾ける熱意の人はなかった。そこで自分は奮然自ら事に当るを決して、大正十三年田中逸平君をして回教巡礼の途に上らしめた。同君は能く万難に克って無事メッカの大祭に参列して幾多貴重なる体験と収獲を得て帰朝した。同君の巡礼収獲によって回教徒及び回教国に関する事情を一層深め、政治的経済的に自分の回教政策に対する信念は益々堅きを加えた。たまたま昭和七年国際連盟会議がジュネーブで開かれた時、自分は浪人代表として頭山、内田両先生より派遣された。

その折磯谷廉介中将（当時少将）の知己を得、帰朝してからは時の陸相荒木貞夫氏の共鳴を得た。昭和八年十一月、田中逸平君を再び起し、外三名の青年を加えて回教巡礼団を聖地メッカに送ったが、田中君は翌九年五月帰朝、痼疾が再発して同年九月白玉楼中に昇天した。折角苦行艱難、再度の巡礼で獲た貴重な収獲も未だ報告書をものするに至らずして亡くなったのである。まことに遺憾の極みであった。田中逸平君は学和漢に通じ、神仏二教に造詣深く、東亜経論を以て終世の志とした尊皇憂國の士、自分の畏友であった。殊に二十年來回教政

策の実践者としてメッカ巡礼の苦業を二回までも体験した唯一の同志である。その田中君が齡ひ知命を過ぐる僅かに二年、今後大いに為すあるの身で忽焉として逝ったのである。自分はここに一臂を失い悼惜措く能わない。

田中君の葬儀は昭和九年十月二十日青山斎場で行われ、朝野の名士数千人の参列者があり、特に世界的回教の長老たるシジット・イブラヒム翁（当時九十三才）の読経が行われ稀に見る盛儀であった。殊にこの葬儀が回教の典儀に拠って行われたことは意義は殊に深く、日本に於ける邦人回教徒としての回教式葬儀の嚆矢であったのである。田

—— 聖地メッカ巡礼第二・三号 ——

3 天鐘・田中逸平伝

有賀文八郎・山岡光太郎翁ら他の先覚に比してその生涯は短い方であったが、初期日本イスラーム界に遺された幾多の業績と足跡は、むしろ他の先達を凌駕するものがある。田中先生逝いてまさに四十五年、いまその歩まれた偉大な道を本誌上に振り返ってみよう。

中君の靈も定めし満足を以て瞑したことでしよう。

○

以上のように「回教世界と日本」の著者は田中逸平氏を痛惜している。金をとるかす炎天下に砂漠の荒塵と闘いつつ艱難苦行を重ねてメッカの大祭に二度まで臨み、東亜経論の為の回教政策に挺身した田中逸平氏の名は、単に拓殖大学先輩としてでなく、日本の回教史の蔭の人として、永久に記憶されるべきであろう。

（当時 拓殖大学学友会副会長）

小村 不二男

（『アッサラーム』一九七九年八月号）

明治時代

先生は明治十五年（一八八三年）二月二日、当時の武州小金井村に呱呱の声を揚げられた。現在の東京都小金井市である。同一二年所沢

小学校に入学して、さらに二六年本郷小学高等科から二八年には郁文館中学へ進学、翌々年の三〇年には京都府立中学へ転学された。

それから台湾協会学校（注、現在の拓殖大学）に入学し、学なかばで有名な漢学者、服部宇之吉博士（のちの京城帝大総長）の驥尾きびに付して渡されたのである。明治三五年新秋九月のことである。現地では国都北京に遊学し実に血のにじみ出るような研鑽苦修すること二年半に及んだ。

この頃、日露兩國間の風雲ようやく急を告げ、その情勢は日を逐って緊迫化した。そこで先生は「日露戦争の裏面史秘史」として後世有名となった北満鉄道爆破行の決死の烈士である沖、横川ら一〇余名と訣別して祖国日本へ一旦帰還された。

かくて明治三七年二月六日、日露の国交断絶するや、先生は決然筆を投じて従軍を志願し、広島第五師団陸軍高等通訳官を拝名征旅の途につかれた。時に弱冠二四才。南満各地に転戦、戦後も三八年暮まで乃木將軍の要請により公主嶺に駐屯された。

日本への凱旋がいせん後は函館商業学校の教壇に立ち、この頃小谷部一郎氏と親交を結ばれた。小谷部氏はかの「成吉思汗は源義経なり」という論考と著書を刊行されて大正時代から昭和の初期にかけて一世のセンセーションを捲き起された人物で、この実証のためモンゴルからシベリア沿海州をたびたび実地踏査されたほどである。

大正時代

明治四五年七月三〇日明治大帝崩御され世は大正と改元されたが、

海の向うの中国大陸では老大国「清国」はまさに倒壊せんとして孫文こと孫逸仙を領袖とする例の「辛亥革命」が勃発して動乱と流血の天地となった。

そして大正三年には対独宣戦布告され、先生も陸軍軍属（奉任官待遇）としてドイツ軍の根拠地青島チヨウキョウ方面に出征、戦後青島軍政署調査部主任兼教育課主任として現地の治政に貢献された。時に三五才、その功績により従七位勲五等を賜った。

大正六年二月、再び帰国されたが小川平吉（のちの鉄道大臣）の後援を得て三たび青島へ赴く。この時代の青島総領事は奇しくも吉田茂（戦後総理大臣）であった。この間、天性健筆家の先生は（注、この点聖地大巡礼第一号の山岡翁と文筆にかけては伯仲の間であり、数多くの著書を刊行されている）山東省都の済南市に「済南日報社」を創設して言論報導界に活躍の傍ら「管仲」（注、有名な漢詩にある——君見ずや管仲鮑淑の交りを——）の研究ならびに「水許伝と梁山泊」について調査された。三国志演義と共に中国の古今を通じての三大小説として庶民に絶大なる人気のある水許伝は、この山東省周辺が主舞台になっているからである。

また中国でも日本でも有名な格言となっている「義は泰山より重し」とか「動かざること泰山の如し」の泰山へも前後通算十三度も登山されて、その都度みずから感懐を賦して漢詩に托されている。

さて先生のイスラームへのアプローチはこの済南在留時代にその根源が始まる。なんととなれば済南市を中心とするこの山東省は中国人ムスリム（支那回教徒）が多く居住しているからである。

当然そこに彼らとの接触交際が頻繁になることは考えられ、殊に日本の皇国神道観については弱冠の頃より造詣の深い先生は、イスラームとの接点発見の一事が急速に開眼され始めたということは容易に我われにも想像されることである。

また一たびこうなると、先生の持ち前の性格上この清真イスラームの神髄に肉迫せずんばやまぬという激烈な攻究心から多くの回教関係漢籍資料を讀破涉しゅうりゃくせつ 獵りやうりやうされた。

回教開眼・清真への道

その傍ら有名なアホン（阿衡——イマームの中国名）を各地の清真礼拝寺に巡訪してその膝下に彼らの教えを乞われたのである。そうしてこの第一声が「支那回教問題の将来と皇国神道」の一文を執筆して発表された。続いて大正十一年、四一才のとき「支那回教の發達と刘介廉」の研究論文を公刊された。

先生の先生たる特色、山岡光太郎翁もそうであったが、ただ単に「象牙の塔」や書齋の中に籠居して研究生活に没頭されるのみでなかったという一事である。「研究を實踐に」「信仰を善行に」移行して実社会の為になることに余力を遣さず献身されたところに、初期日本イスラーム界草分け時代の先覚先人に共通した特色があると思える。

丁度この頃、中国と日本との間をたびたび往復されて金鷄学院主宰の安岡正篤氏と親交し、かの大正十二年九月一日の関東大震災勃発に際しては、急遽帰国し、時の内閣総理大臣山本権兵衛（海軍大将）や、内閣情報部次長広田弘毅（のちの首相、A級戦犯として絞首刑）に面接し

て、震災惨害の救済と復興について種々献言献策されるところがあった。

これは余談であるが、この田中逸平先生の直門であるムハンマド公文直太郎氏も、かの昭和二年三月の丹後大震災に際しては、いち早く被災地に馳せつけ救援活動に挺身の余り、それが因で急死された（注、公文氏の人物プロフィールについては本誌第八号参照）。

それからその年の大晦日に再び帰還されて済南市の清真南大寺（モスク）に参籠され、イスラーム典礼を厳修された。

かくて大正十三年の正月を同寺で迎え、その大教長曹鳳麟老師から正式に清真イスラーム入信の受戒を授けられた。そしてヌールという教名を曹アホンから頂戴され、後に日本イスラーム史上不滅の金字塔を打ち建てられた堅信者（ハニーフ）田中逸平が誕生したことになるのである。

先生は前記清真南大寺で引続き一カ月半に及ぶ参籠修行に精進されて清真イスラームの真精神の奈辺に在りやを悟了すべく必死の努力をされた。その努力の陰には近い将来是が非でもイスラームの根源地「西城」探訪をこの際に敢行してみたいという年来の悲願がひそまっていたからであらう。

先ずそれがために済南市を振り出しに津蒲鐵路線——天津・蒲州間——から京漢鐵路線——北京・漢口間——の主要都市にある清真礼拝寺を巡歴して著名な教長に会見の旅行に出立された。

就中、当代随一の称ある高名な碩学王静齋（漢訳コーラン經の訳者）や王振益らの錚々たる人物の聲咳せいがいに接する好機に恵まれ、光栄に浴せ

られた。

ちなみにこの旅行では大連から奉天まで北行される長途の行程であった。恐らく先生一生における最大の宿願であるメッカ大巡礼を遂行せんがための一種のトレーニング的巡教の意味もあつたのであろう。そして早くもその半年後に先生のこの夢が実現されることになつた。けだし偉大にして靈妙善美なるアッラーのお導きによるものであろう。

——アルハムド・リッラー。

天方（メッカ）へ向う

かくていよいよ大正十三年六月十一日、香港、シンガポール經由で海路アラビアの大聖地メッカへの関門ジッダ港から、世界の神秘境メッカ聖域へ入境されることになつた。

勿論当今の如くバスやタクシーで坦々たる舗道を一時間有餘で楽に行けるものでない。ジッダ・メッカ両地間わずか七〇数キロをラクダの背に跨り四日を要した。折しも現地は盛夏の候である。烈日炎天、水銀柱は六〇度を上下するという言語に絶する灼熱の猛暑であつた。

しかしこの苦しい決死の大巡礼を無事に果された。時に先生四三才、明治四二年山岡光太郎先生が邦人ムスリムとして第一回のハッジを敢行されてから十五年の歳月が流れていた。

それから再び海路青島に帰航されたときは吹く風も肌にはンヤリとする晩秋は十一月の初旬であつた。帰国されるや早速「イスラームと大亜細亜主義」の一論文を草して発表された。また恩師の前記王静斎アホンや律門傘下の有力ムスリム達に巡礼報告講演を開催されたので

ある。

あけて大正十四年一月東京に帰来されたが、このとき奉天（現在の瀋陽）の大教長張徳純アホンと当時大連に寄留していたクルバンガリー師を帯同されているのは注目に値する。何となれば張アホンは後に奉天雪見町に文化清真寺を建立され、昭和初期になってから松林亮師がこのモスクの顧問格で入られた。またクルバンガリー師はこの時点から十五年後に東京代々木にいわゆる「東京モスク」の創建に絶大なる貢献をなされたという、当代イスラーム界の三巨頭が東都に期せずして入京されたという歴史的事実が構成されたからである。

ともあれ、田中先生が張・ク両巨頭を日本へ案内して来られたのは、日本国内におけるイスラームの宣教伝道の方式を討議し、その協賛助力を乞うためであつたらしい。

記録の上では、この年五月のある日都内の目黒の某所で公開の日本で最初の集団礼拝を厳修されたということである。但しこのとき何人位在日ムスリムが参集したか、また誰がイマーム役をされたか等の詳細は不明である。恐らくこの日はジウムア（金曜日）であつたらうと想像される。

更にこの五月の下旬には先生は日本へ随行せしめたムスリム門下生馬錦章君を済南へ帰還せしめて、自分が不在中閉鎖してあつた「歴下書院」の再開を命ぜられた。

そしてその六月には有名な「イスラーム巡礼白雲遊記」を上梓された。この書籍をもって全国を売却しつつ巡教行脚の旅に出られたのであつた。伊勢路を先ず振り出しに北陸から佐渡の島まで、更に転じて信州

路から甲州路へ出られて翌十五年に一旦帰京された。

次に関西方面は京阪神から紀州路を経て名古屋へ、更に房総方面を一巡された。この年六月十五日には高名な大哲学者であり教育者でもある井上哲次郎博士が総長をされている大東文化学院の講師に招請された。

なお、その年も押し詰まった十二月十二日小石川の水道端町で「霊犀社」を開設されて、そこで第一回の邦人ムスリムのみによるイスラーム礼拝方式を厳修されたのである。と申しても恐らくその礼拝者の数は十指にも足りなかったのではなからうか……。

昭和時代

大正十五年はその年も暮れんとする十二月二五日に大正天皇が崩御され、翌日から昭和と改元された。昭和元年はわずか六日で同二年となる。その年の六月三〇日札幌の興亜学会の招きに応じて前述のクルバンガリー師を同伴して北辺の地にイスラーム講演のため出馬。その約半年後の十二月十日には神田宝亭楼における東京医師会主催の「回教徒（ムスリム）とその生活」なる演題で講演された。

更に昭和四年二月十六日、東京府立一中講堂で、中学教員歴史地理学会の求めに応じて「イスラーム及びイスラーム教団」なる題下で熱弁を振われ多大の感銘と感動を教員たちに与えられた。

しかし翌々四月二七日には最も信頼しかつ将来を期待されていたムハンマド公文直太郎を亡くし、その訃報ふくほうに接して人前を構わず涕淚なみだ潜然として号泣されたという。

この昭和期の時代に入ってからも先生は文字通り南船北馬して席の温る暇もなく入りては健筆を執り、出ては滔々たる懸河の雄弁を振ってイスラームの道こそが天上天下古今通じて一貫せる「公道」なることを力説強調されたのであった。今から半世紀前の昭和初期における日本イスラーム界の発展と躍進に如何に貢献されたかその遺徳は評価するに決して寡少ではない。

この天鐘田中逸平門下から多くのムスリムの逸材が輩出している。前記公文直太郎や陸軍中尉・益子勇の外に小生の今日面識のある教友のみでも山本太郎、中島圭之助、内田義徹らの錚々たる先生の法脈系列を曳く人士が輩出している。この点がハッジ第一号ウマル山岡光太郎翁と著しくカラーの異るところである。翁は海外へはよく雄飛されたが、その反面国内では余り巡教行脚された事例はなく、また敢えて後進の育成や後継者の物色には意を介されなかった。言うなれば全く教界の一匹狼として自由奔放に独往濶歩されたのである。

第二回目の聖地巡礼

かくて昭和八年、先生よわい五二才の十二月七日いよいよ意を決してアラビアへ向うべく東都を進発された。これより先、日比谷山水楼において田鍋安之助氏らと会談されている。田鍋翁は邦人として内陸アジアの最深奥地であるアフガニスタン入境者の草分けの一人として有名である（注、イスラーム連絡協議会代表齊藤積平氏の岳父に当る）。

また当時最長老が九〇何才かのラシード・イブラーヒーム翁や年来

の教友クルバンガリー師（現イスラミック・センター・ジャパン勤務アサド氏の殿父）らと壮行惜別の宴を張られた。更に大東文化学院教授諸氏の送別会が赤坂の幸楽で開催された。

今でこそ空路二〇〇有長時間で楽々とアラビアまで飛翔できるが、半世紀前の当時としては破天荒とも言うべき長途の大旅行である。

十二月十四日神戸港より一万トンの箱崎丸に乗船、十九日上海入港、二二日香港、二九日マレーシアのペナンを経て洋上で昭和九年の元旦を迎えて遙かに故国を偲び、コロンボからマドラスで下船。それより陸路インド亜大陸を東より西に横断、有名な回教藩王国ハイデラバードを通過してボンベイへ出られた。何故今回は海路聖地へ直行されなかったか……。それは外でもない年来の希望であったアフガニスタン領をこの機会に探查してみたいというのがその目的であったからである。

インドの首都デリーからペシャーワル經由アフガンの首都カーブルへ到着されたのは一月十五日であった。ここで高垣信造氏と会見するのを楽しみにしておられたが、生憎このとき賜暇帰省中であった。

高垣氏は後の講道館柔道九段（国際部長）で、この頃アフガン政府から招かれてその宮廷で日本柔道のコーチをされていた。余談ながら今六〇才位以上の男の人なら当時講道社発行の「少年倶楽部」や「キング」に連載された、アフガンのプロレスラーを数名投げ飛ばし皇帝アーマヌッラー汗の信任極めて厚く国政顧問をされていた武勇伝の記事をご記憶のかたもあると思う。

閑話休題——白色がいたる雪のヒンズークシュ山脈を遙かに望

見しつづガズニ、カンダハール、ヘラートを経てペルシャの首都テヘランまで自動車で一七〇〇マイルの旅行であった。なおこのときアフガンに随行の青年山本太郎氏（現大阪市在住）を残留せしめて将来に備えられた。テヘランでは、この地で人知れず三五才の若さで客死した益子勇中尉（大正十一年陸軍士官学校卒）の霊を慰められた。

益子氏はかつて現役将校時代東北巡教中の田中先生のイスラーム講演を傾聴して入信、懲戒免官覚悟で軍職を退き、カイロのアズハル大学に留学後、徒歩でレバノン、シリア等の各地で經由してイラク、イランへ入境された狂信的熱血漢であった。

さて先生のそれからの道中は詳記を割愛してハマダーンからバグダード、ダマスカス、カイロを通過してスエズ海峡から三月二五日ジッダに入港された。この間同行の山内秀雄をベイルートから日本へ帰還せしめ、その代わりトルコ巡歴中の中尾秀男をメッカへ帯同された。

そして同二七日聖地メッカで砂漠の獅子王と呼ばれたイブン・サウード王に謁見され、面目をほどこされた。ハッジ第一号の山岡光太郎先生が明治四二年この光栄に初めて浴されて以来実に二七年の星霜が経過している。

逸平先生の最後

こうして第二回目の聖地大巡礼を無事遂行された先生は、同年五月十六日再び神戸港に帰港された。前年十二月に祖国日本出航以来約半

歳振りに懐しき故国の土を踏まれたのである。

しかし今まで無理に無理を重ねておられた先生は遂に病魔の犯すところとなり、帰国されてから僅か三カ月有半の九月十五日午前五時、病いあらたまり忽焉とつえんとして川崎市大師河原の自宅で急逝された。

享年五三才、アジア大陸数億の回教民族（ムスリム）を警策し覚醒を促し、延いては日本イスラーム史上に輝かしき一ページを印された先生は十月二〇日青山祭場で大長老イブラーヒーム翁導師となって日本最初の正式イスラームの葬儀が盛大に執行された。

有賀、山岡両翁が八〇才の長寿を享けてこの世を去られ、その最期は極めて淋しくひっそりとしたものであったのに比し田中先生の生涯は比較的短い一生ではあったが多くの教友関係者の参列の下にイスラーム式に則って盛大に送葬された。その点先生の霊は以って瞑すべきであらう。

付記——本文中、高垣信造先生は先年箱根で逝去、内田義徹兄はこの四月十日福岡市で急逝、中島圭之助兄は故田中先生の遺鉢を継承されて先年聖地巡礼を果され徳島市に健在（前徳島郷土文化会館長）また先生にイスラームの受戒を施された曹アホンの令甥は筆者が内蒙で「西北回教連合会」を組織活動していた四〇数年前の当時に偶然その機関紙「西北鐘声」の主筆として採用した因縁がある。

なお本稿は前記中島兄のご教示を仰ぐところ多く併せて深甚なる謝意を表す。

（当時 イスラミックセンター代表理事）